

五柳叢書



五柳書院

古代言語探究

吳哲男

吳哲男

古代言語研究

江苏工学院图书馆
藏书章

五柳叢書



五柳書院

呉 哲男〔ご・てつお〕

1945年 東京に生まれる

1973年 二松学舎大学大学院博士課程修了（日本古代文学・中国古代文学専攻）

現在 相模女子大学教員

共著 『日本文芸史・古代1』（1986年・河出書房新社）

『シリーズ・古代の文学6 古代文学の変革』（1981年・武蔵野書院）など。

論文 「論語と孔子の間 1」（武蔵大学人文学会雑誌第20巻・1988年）

「論語と孔子の間 2」（相模国文第18号・1990年度）

「家持の属国歌」（古代文学21号・1981年度）

「都市と庭園」（日本文学・1987年5月号）など多数。

古代言語探究

平成4年2月26日初版発行

著者 呉 哲男

発行者 小川康彦

発行所 五柳書院

東京都千代田区一ツ橋2-6-13
千一〇一 電話〇三(三二六四)四四二九
振替 東京2-87479

印刷所 誠宏印刷

製本所 越後堂製本

定価 一、八〇〇円

五柳叢書29 ©1992 TETUO GO

古代言語探究

カバ
ー
作品 装幀

高麗隆彦
遠藤利克

《無題》

一九九一（部分）

目次

序章 古代とは何か 7

第一章 記紀論 17

共同体のパラドックス 古代の「恥」、又は神話の解体について 19

古事記の構成力 日本書紀から古事記へ 25

王権 古事記論批判 38

折口信夫とスサノヲ 48

吉本隆明の国家起源論 57

第二章 万葉論 65

女歌の系譜 67

庭園の詩学 87

第三章 古代観念論

109

清明心の発生

111

「清明心」批判

139

「清明心」の原型

156

祝の系譜

168

序章

古代とは何か

本書が解説の対象とした「古代」とは、主に『古事記』『日本書紀』『万葉集』といったテキストの書かれた時代をさしているのだが、一方で「折口信夫の古代」や「吉本隆明の古代」を読むといった試みもなされている。むろん、それは古代人の心性をもつとされる折口の、あるいは近代日本の批評の領域を拡大したとされる吉本の目をとうして考えられた「古代」のことであるが、いずれにしても本書のいう「古代」では、他のどの時代でもない飛鳥・奈良時代の歴史の固有性を取り出そうとした場合と、かならずしも歴史的概念ではない、むしろそうした時間的なものから自律した、ある普遍的な概念としての古代という、この二つのケースがいわば位相を異にしつつ論じられている。

たとえば、今私の手元には、谷川健一が最近まとめた『南島文学発生論』（一九九一年・思潮社）がある。この書物の冒頭の部分で谷川は、古代日本文学の発生について次のように述べている。

日本本土では記紀以前の文学資料がきわめて少ないために、七、八世紀以前にさかのぼって考察するのは容易ではない。だからといって、ヤマト朝廷で編纂した記紀を日本最古の文学として、日本文学史の冒頭に置くわけにはいかない。この最初の空白の部分を埋める方法はただ一つしか見当たらない。南島の呪謡を介して日本古代文学の黎明を類推するほかない。南島の呪謡は日本文学の起源をめぐる考察の手がかりになるのである。

ここで谷川は、南島の呪謡の世界に『記紀』以前の「古代」を見出している。むろん、それは無前提に見出されたものではなく、「鉄器もなく文字曆もなく、仏教の影響もこうむることのなかった十二、三世紀までの琉球は日本の八世紀初頭、すなわち記紀の時代よりかはるかに以前の社会に属する」という歴史的条件のもとで考えられたものである。しかし、それでもなお、『記紀』のテキストの前に南島の呪謡を置くのは一般的な歴史の順序とは逆である。その意味では、谷川の見出した「古代」とはきわめて方法的なものであると同時に、時間から自律した概念である。

それでは、必ずしも歴史や時間の拘束を受けない自律した「古代」とは具体的にどのようなものが考えられるのであろうか。谷川健一に即していえば、それは巫女の発する言葉の呪力ということである。

南島ではいつまでも自然力が人間のまえに立ちふさがり、それに拮抗できるのは古来伝えられてきた言葉の呪力だけであった。……………。

巫女の口から洩れ出る言葉は陶酔状態が深まるにつれて繰り返しが多くなり、巫女を一層陶酔へと誘い込むと同時に、それを聞く周囲のものをも催眠状態へ駆り立てる。反復するリズムによって対語や対句を伴う形式が整えられ、語が韻を踏むようになるとき、託宣から呪謡が誕生するのは不可避であった。

ここで谷川は、自然の猛威に対して言葉の呪力で拮抗する巫女の中に最も「古代」的な姿を、

あるいは最も「古代文学」的なものをみている。いうまでもないが、こういう考えかた自体はすでに折口信夫の先駆的な仕事の中で説かれてきたものであるが、谷川はそれを現在ぞくぞくと発掘されつつある南島の豊富な古謡群の中から確認しようとしているのである。

ところで、一九八〇年代の日本の批評における最大の収穫とされる柄谷行人の『探究Ⅰ・Ⅱ』（一九八六・八九年・講談社）は、近代人の普遍的な思考の中にひそむ「独我論」を無根拠な形而上学として解体をせまった哲学基礎論ともいうべきものであり、それゆえ単に哲学の分野のみならず、言語学、経済学、宗教学、文学など諸ジャンルへの基礎的な批評ともなっている。

したがって、たとえば谷川健一が『南島文学発生論』の中で歴史の「古代」ではなく、論理の「古代」として抽出した巫女（シャーマン）の言葉の呪力も、次のような批判にさらされることになる。

シャーマニズムは、個体を共同体に同致させる技術である。シャーマンの「言葉」は共同体の意志、あるいは共同体の矛盾を察知しそれを解消させようとする。……。それは説得のための言語を必要としないし、むしろ言葉をしりぞける。……。

だが、他人を強制する権力に転化しないような神秘主義などありえない。なぜなら、それは「実在」（真理）を握っているからであり、万人がそれに従わねばならないからである。また、「真理」の実現をさまざまにあげている者は排除されねばならない。この意味で、「理性」が、魔術を排除し非理性（狂気）の領域に追放したなどというのは当たっていない。理性やイデ

アというものは、むしろ魔術に由来し、魔術的に機能するのである。

魔術が通用するのは、共同体の内部だけである。それは自然を動かすのではなく、人間を動かす。その「力」は、人間を拘束している共同幻想の範囲をこえられない。それは、共同体の外部では通用しないからである。実際のところ、魔術の「力」とは、共同体の拘束力にほかならない。それが「力」をもつのは、近代国家の具体的な諸制度においてである。それをはなれて近代合理主義なるものを一般的に想定し、さらにその克服を「魔術の回復」に見出すというのは、まったくの錯誤である。

〔世界宗教をめぐって〕

ここで柄谷は、近代的な理性の言葉と古代的な呪術の言葉が逆説的に一致することを指摘している。それは古代を論じる者が、安易に古代の呪的なことば（もっぱらそれは異世界からもたらされるとする）の側から近代の衰弱した言葉を撃つなどというのは転倒した見方だということでもある。むしろ、この批判は直接谷川の仕事に向けられたものではなく、それどころか総ての知の領域にかかわる基礎的な問いであるといつてよい。

二

中沢新一は、日本中世の王権について論じた『悪党的思考』（一九八八年・平凡社）の中で、『ミル・プラトー』（ドゥルーズ・ガタリ）にならい、「仕切られた空間」と「なめらかな空間」という言葉を用いている。この言葉は、中世王権のみならず「古代」とは何かということについて考えようとするときにも重要な示唆を与えてくれる。

空間を仕切ること、空間を構造化し、均質な計量可能な部分をつくりだすこと。ここには、「稲の王」としての天皇を中心とする太政官的古代権力のベースがあり、この律令国家の成立があったればこそ、のちの荘園制の展開にはじまる中世そして近世の諸権力の成立も可能になったのです。「仕切られた空間」を制度的に産出しようという律令国家のこの事業をおして、この列島には、新しいレベルの権力が、さまざまに姿を変えながら、展開してくるようになったわけだ。

けれど、もう一方で、この列島上には「なめらかな空間」というものが、無数に存在していたのです。この空間はいろいろな特徴をもっていますが、一種の流動体であり、もっと抽象化していえば、多様体にはかなりません。そしてその一つが、「山」だった。（それは）計量化不能であると同時に、それを構造化することもできない。……。ノーマルなやり方では、租税の対象にすることのできない「なめらかな空間」を、いかに支配していくか。これは、あらゆる王権、あらゆる政治権力にとって、とても一筋縄ではいかない難問だったことでしょう。その難問に、日本の天皇制は、きわめて独自なやり方で、一つの解決を与えようとしたのです。……。『なめらかな空間』の直接捕獲の技術にたけていたおかげで、天皇制という王権の形態は、日本人にとって度しがたい力をもつようになったのです。日本人が感情の領域に、自然の領域に、じぶんの感性のソナー（探知器）をおろしていこうとするとき、かならず、何と言うか一種の天皇制的な自然感性のかたちに触れていくことになる、その深い理由はまさにこのところにあります。自然感性や感情は、個人個人の欲望の体制の中の、ちょうど「なめらかな空間」にあたる部分にわきあがってくるものです。その部分に深く深

く踏み込んでいけばいくほど、日本人の感性は、天皇制的な美学に抵触していく。

（異教的モノティスム）

ここに述べられていることは、ある意味では本書のモチーフと共通している。たとえば第二章の「庭園の詩学」では、仕切られた空間としての古代王権の宇宙論がテーマとなっている。苑（庭園）は地上に実現された聖なる世界の具体的な写しとして出発しながら、万葉和歌史のなかで詠みつがれてゆくうちに宇宙論的な意味は解体し、やがて自然と感情の融和といったことが歌の主題にとってかわってしまうことになる。しかし、それこそが「仕切られた空間」による「なめらかな空間」の罫い込みであって、「桜」と「山桜」が区別されることにおいて天皇制の美学は人々の生活に内属しつつ支配を貫徹することになる。

だが、『悪党的思考』の主題が「なめらかな空間」の可能性について開示しようと言うのであれば、本書の私の関心とは異なる。むしろ逆と言ったほうがよいかもしれない。なぜなら「なめらかな空間」それ自体などあり得ないからである。「仕切られた空間」という均質で計量可能なものが成立することにおいて、はじめて計量不能で構造化もできない「なめらかな空間」が意味を持つことになるのだ。その発生の機制を問うことこそが中世でも近世でもない「古代」研究のあり方なのである。第一章の「古事記の構成力」では、「仕切られた空間」の産物である「文字」（構成力）の成立によって逆に口誦性すなわち「語り」という「なめらかな空間」の価値の顕在化されるしくみが論じられている。この点は、「折口信夫とスサノヲ」の場合も同様である。律令という「仕切られた空間」の抑圧から逸脱し母性空間へと回帰するスサノヲ＝折口のさまを讀